

## 会誌のはたちを祝う

二十回生 久保利也

### 千里山会誌二十号 オメデトウ

「はたちになつたら酒が飲めるんだぞ!」「たばこもすえるんだ!」こんなたあいのない夢と期待、希望を喜び合つたのがついこの間のように思われますが、この夢を果たした後はなにも取柄のない徒勞に近い生涯を過ごしてしまつたような懺悔を抱きつつ、ただ小学生時代の想い出などに耽り、語り合つて傘寿も通り越した昨今、諦観の心境で對抗心も敵愾心もなく平々凡々と健康体であれば良いと悟りを得た心境です。

そして稀有な小学校の同窓会、そしてその会報がなんと二〇年を遍歴したという現実。しかもあらゆる分野の方々が歴史や記録と共に各々の足跡を寄稿し、披露するという内容は比類のない刊行物となりました。この会誌が二〇年とはまことに喜ばしい、めでたい立派なことだと心から祝福いたします。

つい先年までは、はたちになつた人達は一月十五日

六十歳 耳順 じじゅん

思慮が熟し、人の言葉を

素直に聞ける歳。

七十歳 従心 じゅうしん

心のままにふるまつても

道はずれない年。

という異称があります。

ただ、はたちという呼称が入っていないのでこれを調べましたら、はたちとは一〇の二倍の数、ハタはフタの意、チは接尾語、とありました。

はたち即ち二〇年という歳月はまさに尊いそして輝かしい成長の途次といわれます。

千里山会誌がこのはたちを迎えたことは益々盛り栄えるという観点で誠に意義深いものがあります。

これに遭遇したわたし達は至福の当事者という訳ですが、これまで企画編集のご苦勞をいただいた方々には深甚の感謝を申し述べたいと思います。

さて、会誌十号で創刊者であり編集のすべてを企画運営してこられた柿崎さまが、後進に道を譲るとして交代され、その十号で寄稿者一覧表なるものを作成してくださいました。

寄稿者一二三、編集部記載のもの十二、計一三五名の著作数は登録会員の総数とほぼ同じ、即ち全員が何

に成人式という式典で祝福されましたが、昭和二十三年七月二十日に公布された政令によつてこれが毎年一月第二月曜日を成人の日と定められ全国で賑々しく祝われることになりました。しかしほんとうの定義を知らない若者が一部で暴徒となるようなことがおこつていふようです。これは大人になつたことを自覚し、みずから生き抜こうとする青年を祝いはげます日と定められたものです。

我が国には賀寿と称する祝いがあり、ご存知の還暦、喜寿、米寿といった長寿を祝い喜ぶというしきたりがありましたが、別に年齢の異称として

十五歳 志学 しがく 学問にこころざす年。

二十歳 弱冠 じゃつかん 志を立てるべき年。

三十歳 而立 じりつ 「弱」は二十歳。冠をつ

ける年。成人する年。

四十歳 不惑 ふわく 一人前になるべき年。

五十歳 知命 ちめい いろいろなと迷わない年。

自信をもつべき年。

天命を知る年。自分の運

命をわかまえる年。

かを書いたという記録です。

ただ編集者も書いておられますが四〇学年の中は、ひとつの景色も行事もかなりようすの変つたものとなりました。しかしこれが而立、不惑、知命と継続されるならば立派な史書になると確信いたします。そのためにもなるべく重複したことを書かないでゆきたいと願うのは、是非ともバックナンバーを再読して欲しいということですが、第四号四十九ページ、萩原さんの追記「過去の会誌に類似作品がないか、何回も読み返しました」というのを引用させていただいて、これを貴重な意見、助言として一号から是非再読して欲しいと思います。

わたしはこの二〇号の慶祝記念として、なにかを残したいと考え、一号〜一九号の「総索引」を計画し数週間努力しましたが、体、能、智力の衰えで断念。どなたかの着手を期待、希望する羽目となりました。

どうぞ週刊誌のように、読み放しになさらないでください。

そこで独断と偏見をおゆるし願つて、規範となるような作品を各号一、二篇ずつチョイスいたしました。これだけは是非とも再精読をお薦めする次第です。

繙いてくだされば明瞭ですから、敢えて著者名をカ  
ットしました。

号数字	頁数字	表題
一 号	十六	同窓会の楽しみと苦勞
二 号	二十五	裏方四方山話(上)
三 号	十九	ボケに目覚めたわが人生
四 号	五十一	裏方四方山話(中)
五 号	六十三	裏方四方山話(下)
六 号	七十四	水源地とお稲荷さん
七 号	三十	千里山このごろ
八 号	四十七	MY千里山
九 号	三十	遙かな千里山の風
一〇号	三十八	あの頃の千里山商店街
一一号	四十六	昭和二十二〜三年頃の千里山
一二号	六十七	千里山開発物語(一)
一三号	七十四	「いろは」の替え歌
一四号	四	さよなら木造旧校舍
一五号	六十一	千里山開発物語(二)
一六号	三十一	二千里の道も遠からず
一七号	四十四	わたしの千里山

七 号	五十四	お前大きくなったら何になんねん?
八 号	五十六	千里山開発物語(三)
九 号	六十	北欧での再開と思いの千里山
一〇号	八十九	沖の鳥島の夢
一一号	八十	千里山開発物語(五)
一二号	八十九	校長と校醫を兄弟で
一三号	九十二	昭和前期の千二小に盡す
一四号	九十五	ホット・スクランブル
一五号	七	千里山開発物語(後編一)
一六号	十九	千里山開発物語(後編二)
一七号	一二七	千里山開発物語(後編三)
一八号	一三〇	千里山開発物語(後編四)
一九号	一三四	音ハ楽シ
二〇号	一三七	千里山開発物語(後編五)
二一号	六十三	MY TOWN
二二号	六十九	(最終回)
二三号	七十二	
二四号	七十五	
二五号	七十九	
二六号	八十三	

十 号	九十一	千里山短信
一一号	九十七	住みよいまちをめざして
一二号	付表	会誌千里山 寄稿者一覧表
一三号		(全十六頁)
一四号	七十三	千里第二小学校ものがたり(一)
一五号	七十九	戦時中の千里第二小学校
一六号	一〇八	千里第二小学校ものがたり(二)
一七号	三十九	特集「甦れ 千里山会」
一八号	五十五	千里第二小学校ものがたり(三)
一九号	九十九	千里山時代のあそびスケッチ
二〇号	五十六	吹田市立第一中学校の創立と
二一号	六	在学三年間の想い出
二二号	一一六	米寿を迎えて
二三号	六	千里山今昔展を拝見して
二四号	二十六	追憶
二五号		わたしにとつての「戦争」
二六号		十一氏の回想
二七号	八十六	千里山の果ては今(一)
二八号	一〇〇	千里山の果ては今(二)
二九号	一〇四	千里山賛歌

ここには挙げませんでしたが、伊東競子さん、林裕三さんの作品  
などは近い将来、山脇文学賞とか筒井文学賞というのが創設される  
ならば、必ずや推荐されると思われる優秀な作品であり、読みごた  
えのあるものです。



五拾錢、**金貳拾五圓也**  
銀貨、**三和銀行**

千里山文庫

これは趣味のコレクションとして保存していたものを、そろそろ  
整理処分しようとしていた箱から出てきた未開封のコイン箱です。  
包装には五十錢銀貨となっておりますが、実際には五十錢銅貨、発  
行年号は昭和二十三年です。  
バラ銭ではあまり高価なものではないようですが、短い期間東水  
前にあった銀行が三和銀行であったという証拠品であり、思い出記  
念として貴重なものです。寸法確認のため現行貨幣を並べました。

**SENRIYAMA**  
千里山まちづくり協議会  
2015. 10. 31 【秋号】

**1 「千里山大学」を提案します**

心ふれあうまち、安全で住み良いまち、美しく楽しいまち、千里山をめざして

千里山コミュニティ協議会 理事長 神徳 守

千里山コミュニティセンターが開館してすでに半年が経ちました。  
 「この地にお住まいの皆さんが「コミュニティの醸成」に向けての想いがいい  
 っばいに詰まっているこの場で、新しい時代に向けてのコミュニティを作り上  
 げてゆく楽しさをみんなんで実感できる。」  
 そんな施設を目指して、日々運営をしています。

投稿歓迎! ご意見や千里山ニュースなどへの情報をお寄せ下さい。ブログ「ちさとの風」へのコメントやトラック  
 バックもよろしくお願ひします。千里山まちづくり協議会では会員を常時募集しています! (年会費:1000円)  
 以上、当協議会また開催イベントなど、お問い合わせやご参加の際には、お気軽に下記事務局までご連絡下さい。  
 発行: 千里山まちづくり協議会 会長: 筒井一光 事務局長: 松岡要三 編集: 中野直衛・小島功  
 事務局: 〒565-0851 吹田市千里山西5丁目11-19 千里山会館内 TEL: 06-6384-0603  
 (年会費などの振込み口座番号: 00990-7-278514 口座名称: 千里山まちづくり協議会)  
 ブログ: ちさとの風 <http://blog.goo.ne.jp/chisato-wind>

先日テレビを観ていましたら、大阪東部の某市で住民の高齢化が進み、過疎に加えて住居も老朽化し、街の財政がピンチを迎えているドキュメンタリーを映していました。既に北海道や九州の元炭鉱町が財政破綻し、行政のストップと学童不足で廃校したという現実をみまして、つくづくわたし達は幸せだなと考えます。

千二小という絆で結ばれている会員各位は日本各地でそして諸外国でもご活躍のようですが、いろんな事情で大阪をはなれ、ふるさとを千里山に残して来ますが、わたし達のふるさととは心配なしです。

平成十五年(二〇〇三年)に、まちづくり協議会が設立され「ちさとの風」と称するタウン情報誌を、春秋年二回発行し多様に活動しています。

二〇一六年秋号(第二七号)を中野氏が送って来てくれました。(A3版2ツ折 カラー印刷)

東京千里山会のスタッフもこの中野直衛さんと瀧梢さん、田代しんたろうさんが企画運営編集に携わってくださっていますが、次々と新しいプロジェクトを

## 「ちさとの風」よ アリガトウ

立ちあげるのみならず、地域の資源(ヒト・モノ・コト)を掘り起こし、再生、再活用できる仕組みを創ってゆこうというコンセプトに感心すると共に感謝しています。

わたし達のイメージや記憶とは異なった風景や住民の生活行動、そして次々と催されるイベントや新しく構築される施設や交通網、改革的な街づくりを進めながら住民とのコミュニケーションを図るといふ、行政のお手本となるような活動は、わたし達が歩んで来た道を更に掘り起こして二十一世紀の街、未来を築くために古来を十分に研究し、環境との調和を分析する芸術哲学へ進展させる必要があると説いています。

そしてこの展開のために必要な情報や記録の確認や保存には吹田市をはじめ近隣の公共団体やURや関西大学等との連繫、折衝に奔走し予算の工面や情報宣伝、普及にご苦勞をいただいているようです。



## 1 千里山駅西側空間のデザインワークショップに参加して

市の「千里山駅周辺整備事業」の駅西側の整備がようやく着手されるということで、どんな場所になるとよいか、まず市民の声を聞くというデザインワークショップが3月3日と3月30日の2度にわたり開かれました。

### 【千里山駅西側の駅前空間について考えよう】

第1回目は30人足らずの住民の参加がありました。この催しの広告は掲示板にも出ていたので、もう少し多数の参加者があるかと思っていました。広報にも問題があるのかもしれませんが。

まず、対象となる空間は駅前西側の交番（近い将来交番は東側に移転予定）の跡地と田村書店の跡地、阪急の駅沿い道路であると説明がありましたが、参加者からそれ以外のレッチワースロードや踏切近辺に関しても考えを述べたいとの意見が相次ぎ、日頃思っている考えは自由に述べていただいてよいと司会者から言われ、ワークショップが始まる前に様々意見が出ました。

本題に入り、最初に「ワークショップとは何？」という説明から始まり、参加者は3グループに分かれました。

各グループでは、手慣れたファシリテーター（グループ進行役）のもと各人が大いに考えを述べ、それらの意見をファシリテーターが小さい用紙に書き、駅近辺を描いた模造紙の図面上に貼り込んでいく作業が続きました。

最後に3グループからそれぞれの代表が、話し合った考えを満載した用紙を持って前に出て全員に発表し、情報を共有しました。



田村書店の跡地



駅前交番